

県史談会 平成29年5月14日(日) 史跡めぐり

横浜貿易新報社・県下名勝史跡45佳選当選記念碑 「鮎の水郷田名」(19位 83,413票)中心に 相模原市田名を歩く

【担当】荻田 豊

【見学箇所と参考資料など】

1. 昭和橋・当麻の渡し(車窓)

昭和橋は厚木市上依知と相模原市南区当麻とを結ぶ橋で、県道508号厚木城山線が通る。橋の架かっている付近ではかつて「当麻(上依知)の渡し」と呼ばれる渡し船が行われていた。これは平塚八王子・埼玉往還の経由地となっていた。渡船は上依知側に依託されていたが、明治24年(1892)に当麻側に渡賃が請求され始めた。大正14年(1925)に近衛工兵隊により仮橋を架橋も間もなく洪水で流出、再び渡船に戻るが、昭和3年(1928)の洪水で渡船に被害が出た。この災害復旧事業として架橋が決まり、昭和の経済不況のあおりを受けたものの、昭和6年(1931)に開通した。昭和の初めに竣工し、新時代を象徴する橋ということでこの名が命名された。

2. 史跡田名向原遺跡公園・旧石器時代学習館

この遺跡は、しおだ土地区画整理事業に伴う発掘調査によって平成9年3月に発見された。発見された旧石器時代の住居状の遺構は、人類の定住化の歴史を語る重要な遺跡として、関係者の協力により保存することができた。その後、平成11年1月28日に国の史跡指定を受けた。(詳細は現地ガイドの解説を)

3. でえの坂

道標に、坂の脇にある家の屋号が「でえ(台)」なのでこの名があると書かれている。

4. 大杉の池

遠く高尾山からも見えたという大杉は昭和12年9月の台風で倒れてしまった。大きな池は半在家、塩田へと流れる「紅葉川」(当麻地区では八瀬川と呼ぶ)の水源となっている。かつてこの池の近くの明覚寺に田名村役場あったことから川は「やくばのかわ」、池は「やくばのいけ」などと呼ばれたこともある。池の隣の弁財天の西側は、明覚寺の跡で、できたのは鎌倉時代の建永元年(1206)といわれ、寺を開いた良山阿闍梨は承久3年(1221)に亡くなったといわれている。同寺はもと南の諏訪社の別当寺であったと思われる。江戸時代の終わり頃には水郷田名の八幡宮の別当寺ともなり、田名村の中心的存在となっていた。

5. 蚕影山神社

この地はもともと諏訪社の敷地で、今は蚕影山のほこらの中に、お諏訪様と金比羅様が一緒に祀られている。このお諏訪様は、八幡宮が田名の鎮守となる前の、村の中心的神社であった。

蚕影山は、養蚕の神として信仰を集め、相模原市では江戸時代の終わり頃に各地で盛んに行事が行われ、中でも堀之内はよく知られていた。

向かって右側の道祖神は、ほかの庚申塔や大山不動の道標などと一緒に、元は西方の「大曲がり」と呼ばれた坂の上にあったものを道路の改修工事で移したもので、特にこの陽石は市域は勿論、近隣の市町村にはない見事なものとして有名である。

6. 相模田名民家資料館

明治、大正、昭和初期と約70年の間、横浜開港と同じくして、生糸は米国を始め欧州各国への輸出の花形であり、全国各地に養蚕は盛んになり、水田の無い相模原地方では現金収入を求めて、各農家では養蚕に力を入れていた。中でも田名では産業組合が中心になり、製糸事業が盛んであった。組合では地区内に二ヶ所の製糸工場を建て、農家の子女をして従事させて雇用の面でも一石二鳥の役割を果たした。また各農家でも足踏座繰機にて生糸を生産して生活に潤いをもたらしたのである。大正、昭和初期、上溝の市を賑わしたのも生糸の取引が大

きく貢献したことは言うまでもない（大正13年の県下組合の貯金高が田名産業組合が抜きん出ていたのもこの証左といえる。※館内に大正13年頃の番付表が掲示してあり、そこに県内2番目西の横綱とある）。当時、田名の農家の90%が養蚕に携わり、蚕にかかわる話は尽きるところがないほどである。これらの業績を後世に伝えんものと祖先が残した財産、三栗山の収益金を基金として資料館を建設したのである。そして、この地を選定したのは、隣の大杉公園は田名小学校の前身である覚明学舎および田名村役場のあった所であり、田名行政文化の発祥の地といわれた。明治29年田名小学校は現在地に、田名村役場は現在出張所、公民館駐車場の所へ移転したといわれる。田名小学校100周年記念事業に地域から収集した貴重な資料も提供していただき展示した所以のものです。二階は展示室に、一階は昔の語りべの館として、また生活学習の場として大いに活用していただきたいものです。（館内掲示の館長挨拶より転載）

建物は川崎市の子供の国近くから120年くらい経つ養蚕農家を移築したもので、平成7年に完成した。

7. 烏山領制札場跡（別添資料：新編相模国風土記稿）

江戸時代中頃まで領主はたびたび変わったが、享保13年(1728)以後、明治維新まで田名村は烏山藩大久保氏の領地だった。制札場は幕府や藩の命令、知らせなどの立て札を立てた場所で、田名村には4人の名主が交代で村の世話を勤めていたので、4箇所以上の制札場があったと想像されるがここ以外は不明である。

8. （展望地）三栗山・小沢古城・小沢城・ステゴドンゾウの頭骨化石

三栗山：田名村の入会地(秣場) 現在はスポーツ広場として市に貸与している。

小沢古城：説明板「小沢古城址」に、小沢には二つの城址があり、そのうちの一つは当地の豪族小沢氏の館跡である。小沢氏は、平安時代の末期から鎌倉時代にかけて活躍した武士団武蔵七党のうち、八王子を拠点にして栄えた横山党の一族で、代々ここに館をかまえて支配した。対岸の田

名氏、上流の小倉氏も共に横山党の一族であった。東方に断崖をもって相模川にのぞみ、西方は沢の溪流に接し、北方は三栗山の峰に連なり、南方は展望を良くしていた。館への入口は西方の沢に橋を架け、そこから登板して正門に至ったという。以前には、架橋跡、門跡などがあったと伝わるが今はない。

小沢城：説明板「小沢城址」に、城址はこの城坂の上方台地にある。中津原台地の東北隅突端の地形を利用して要害とした山城で、室町時代初期の築城といわれる。城域は5,700平方メートルほどの広さをもっていた。城主は金子掃部助。山ノ内上杉氏に従っていた長尾景仲に連なる長尾景春の家臣であった。しかるに文明9年(1477)1月、扇ヶ谷上杉氏の太田道灌によって攻撃され、4月18日に落城した。いま、遺構として城址の南辺に濠跡をとどめるほか、城坂、城の内、馬つくろい場などの地名がある。また、城主一族の落城秘話が伝説として残っている。

ステゴドンゾウの頭骨化石：昭和62年(1987)に小沢地区の中津層群神沢層から発見される。大きさや臼歯の様子から子どものものと考えられる。

9. 田名坂上遺跡・薬師堂跡

田名坂上遺跡は今は住宅地になってしまった。ここから出土したものの中に、「奈良三彩の小壺」(市指定文化財)がある。「奈良三彩」は奈良時代我が国で作られた三色に彩られた陶器で、これまでに正倉院を始め、有力寺社などで発見されているが、これは奈良時代に田名に有力者が住んでいたことを物語るものである。

薬師堂跡には文政3年(1820)に建てられた聖徳太子塔がある。太子講は主に職人によって信仰されているので、この塔も職人衆によって建てられたものと思われる。

10. 滝坂・秋葉大権現

滝坂は堀之内と滝を結ぶ坂である。

秋葉大権現は静岡県にある秋葉山三尺坊のことで、火防鎮護の神として江戸時代から人々の信仰を集めていた。この灯籠は安永7年(1787)に滝の人々によって建てられた。

11. 瀧澤山宗祐寺(曹洞宗) (別添資料：新編相模国風土記稿)

1616年に曹洞宗の寺院となる。それ以前は天台宗の寺院で、古い記録では13世紀にはすでにこの地に位置づいていたことがわかる。当時の本尊は虚空蔵菩薩、現在は釈迦三尊である。根小屋の大井山功雲寺の末寺で、御開山は功雲寺10世・仏光普月禅師・柳山洞絮大和尚である。

涅槃図(軸装、紙本着色・タテ296、ヨコ174.5cm)が市指定有形文化財で、作者は恩馬村(現海老名市)の金指桂山(狩野派・町絵師、弘化3・1846年没)。画面下部に海の生物が生き生きと描かれている点が他の涅槃図と大きく異なる特徴である。

墓地には、文政7年(1824)に村人を助けるために、自分の危険も顧みず、領主の不正を役人に訴えた名主の八郎右衛門や久兵衛土手の工事に尽力した江成久兵衛の墓石があり、墓地の造成工事の時に古墳時代の高塚式の古墳が発見された。

12. 田名山王坂の徳本念仏塔(市登録有形民俗文化財)

徳本は、宝暦8年(1758)に紀州に生まれ、江戸時代後期に伊豆や関東の各地に念仏を広めた僧である。徳本が近隣を訪れた際に、各村々の念仏講中がその特徴ある書体で書かれた名号(南無阿弥陀仏)を求め、それをもとに念仏塔を建てたとされる。相模原には晩年の文化年間(1804～1817)に訪れたと思われ、念仏塔は市内に14箇所にある。ちなみに、厚木市内では上依知の瑠璃光寺や妻田東の西福寺などにある。

13. 山王坂

坂の途中に山王社があったからこの名がある。切り通しの途中に見える大きな石は、今から1万5千年程前、富士山の山頂にあった氷河が、富士山の噴火とともに溶け、泥流とともに上流から流れてきたものといわれる。相模川崖下に烏山用水の取水口がある。

14. 滝の渡し

滝集落と対岸の葉山島下河原集落を結ぶ。相模川の田名地区にはほかに久所の渡しや望地の渡しなどがあるが、ここの渡しが最も近年(昭和47年頃)まで行われた。

15. 烏山用水

烏山藩は栃木県烏山町に居城を持ち、享保13年(1728)より相模の領地(39ヵ村)を合わせて3万石の大名となり、那珂川の開田事業にない年貢の増収を田名の地にも及ぼそうとした。家老の久野監物が指揮をとり、滝の名主(篠崎利右衛門)宅に厚木役所より交代で監督が宿泊し、滝の山王崖下の相模川より隧道を掘って進んだが、途中堅い礫層に当り、仕方なく丸い鉄砲抜きとした。昼間は御用と書いた旗を立て、夜は御用の提灯をつけて水堀を造ったが、1粒の米の収穫もなく万延元年(1860)の大洪水で流出してしまった。

16. 田名八幡宮 (別添資料：新編相模国風土記稿)

元は天地大明神といわれる。

的祭(まとまち)：市指定無形民俗文化財

豊凶を占う歩射(ぶしゃ)行事。起源は、古記録「鎮守祭礼人数帳」によれば、源頼朝の時代といわれるが、「八幡宮縁起」には元禄時代とも記される。神官がくじ引きで正副の射手を決め、弓矢を授け、天地大明神に参拝後の場につき計12回射て、その年の作物の豊凶を占う。射手は満2～5才の男児で、前年に不幸のなかった家から選ぶ。毎年1月16日に行われる。

17. 相模川ふれあい科学館・江成久兵衛像

市立相模川ふれあい科学館は、昭和62年(1987)11月15日開館。

江成久兵衛は文化14年(1817)に久所に生まれ、幼名を万吉と称し、12歳で家督を継ぎ久兵衛と改め、父親とともに新戸に移住して水車業を営んでいたが、26歳の時江戸に出て、酒、油業店に勤め、安政6年(1859)43歳の頃久所に帰り、万延元年(1860)藩主より許可を受け水車業を行い、石臼2台、杵20本を備えたので人々は「大車」と呼んだ。この間、水堀の補修、築堤工事、開田事業に尽した。その蔭には、恩師、葉山島小澤山東林寺の住職、法如師の指導と援助があった。明治

33年(1900)10月83歳の生涯を閉じた。

18. 江成銀蔵家墓地（別添資料：新編相模国風土記稿）

江戸時代を通して田名村久所組の名主を勤めた家柄で、現在東京に住む子孫の陶山家には天文19年(1550)から天正16年(1588)にかけての北条氏と田名村にかかわる古文書21点が残されている。宝暦10年(1760)に名主五郎左衛門が書き留めた記録によると、五郎左衛門の先祖の初代と2代が筑後と名乗り、ともに北条氏から小代官を命じられていたという。当主は日露戦争で戦死したため、現在直系の子孫は田名には住んでいない。三業組合の検番や45佳選の「鮎の水郷田名」の碑はこの隣にあった。

19. 白子園稲荷・大鷲神社・45佳選「鮎の■水郷田名」記念碑

白子園稲荷：しらこえんいなり 不明

大鷲神社：おおとりじんじゃ

45佳選「鮎の■水郷田名」記念碑：第19位 83,413票 以前は江成銀蔵家墓地近くにあった。

20. 久所の渡し（小沢の渡し）

愛川町側に説明板「小沢渡船場跡」があり、そこに、小沢渡船場は、古くより交通の要所であった。とりわけ、中世のころ大きな勢力をもっていた小田原の北条氏にとって、この渡船場は関八州掌握の重要拠点であった八王子の滝山城との連絡や軍兵の往来に欠くことのできない存在であった。そのころ小沢渡船場は、相模川の川西の十力村で船二艘をもち、舟渡しを行うことを北条氏から許されていた。降って天保のころ(1830～44)につくられた相模国風土記稿には、「渡船場 相模川ニアリ 巾三十間許 武州八王子路二係ル所ナリ 船二艘ヲ置 高座郡田名村ト組合持」と、この渡船場について記している。

21. 神奈川県新八景石柱

神奈川新聞の昭和25年11月19日に「神奈川県新八景きまる」という見出しの記事があり、湯河原城山公園・小田原城址公園・野毛山公園とかもん山・横須賀十景・逗子八景・水郷田名・弘法山公園と鶴巻温泉・金沢八景と能見堂公園が載る。これを記念して、昭和27年3月に

水郷田名観光協会が時の県知事・内山岩太郎筆の石柱を建立する。

22. 高田橋・橋100景碑・鮎供養碑

橋は大正13年(1924)にそれまでの渡しに代わって造られ、その名は、対岸の高峰村と田名村を結ぶことから「高田橋」と名付けられた。

昭和51年から始まった「かながわの50選・100選」シリーズは、「名産」・「景勝」・「名木」などのテーマで選定が続き、平成2年度は「橋」となり、「かながわの橋100選」を選定した。近くでは新昭和橋と相模川水路橋などがある。

23. 久兵衛土堤の碑

17. の江成久兵衛像を参照